

# アルベルトゥス・マグヌスにおける表象力について

小林 剛

## 序

古代ギリシアに端を発する自然に関する学問的営みは、中世において保持され展開され続けて、最終的には近代以降の西欧社会へと受け渡されていった。その過程で最も重要な役割を果たした方法論上の前提の一つに帰納的一般化と呼ばれる前提があったと言われている。現在の中世科学史研究の第一人者の一人であるエドワード・グラントはこの帰納的一般化を次のように説明する<sup>1)</sup>。すなわち、我々人間にとって多くの例において真であると観察され、どの例においても偽であるとは観察されていない事柄<sup>2)</sup>、たとえば火は熱いとか、天は動いているといった事柄は、通常 of 自然の成り行きが成立している限りでは、つまり、神による奇跡などの偶発事が生じなければ真であり、そのようにして人間は自然に関する学問的真理をその原理から把握することができる方法論である。このような方法論を目の前にしたとき我々現代の哲学研究者には直ちに次のような疑問が思い浮かぶであろう。我々人間にとって多くの例において真であると観察され、偽であると観察されていないだけの事柄をどうして真であると考えてよいのか。また、そのとき真であることの条件となっている「通常 of 自然の成り行き *communis cursus naturae*」とは一体どのようなことをさしているのであろうか。

このような帰納的一般化という方法論をグラントは14世紀の著名なパリ大学学芸学部教師であったジャン・ビュリダンのものとして紹介している<sup>3)</sup>。ただし少なくとも通常 of 自然の成り行きという概念についてはビュリダンが最初に提出したのではなく、12世紀にはすでに登場している<sup>4)</sup>。しかしグラントも述べているように、12世紀後半から13世紀にかけてアリストテレスの哲学が導入されて以来中世の自然理解はその根本から変化したように思われる。そこで本稿では、その時代以降において、アリストテレス自身や、アリストテレスの解説者として広く学ばれたイスラムの註解

者たちと同程度の権威を与えられた唯一の西欧の自然哲学者、自然学者であると言われ<sup>5)</sup>、「自然の成り行き *cursus naturae*」について語った<sup>6)</sup> 最初期の思想家であると思われるアルベルトゥス・マグヌスに焦点を当てたい。特に観察、つまり感覚認識に関する彼の理論の中で、真偽判断に係わる感覚能力であるとされている表象力 *phantasia*、評定力 *aestimativa* と彼の自然概念との関係に焦点を当てることにしたい。

## 1 表象力、評定力の定義

まず手始めに、アルベルトゥスが考える表象力、評定力の定義について簡単にまとめておきたい。アルベルトゥスの『人間論』という著作<sup>7)</sup>によれば表象力とは最広義にはアリストテレス『靈魂論』第3巻で定義されている通り、「現実態に在る感覚活動によって引き起こされる運動」である<sup>8)</sup>。この意味では表象力も評定力も想像力<sup>9)</sup>も違いはない。これに対して広義（最広義に対しては狭義）には表象力とは諸々の感覚像を複合分離しながら比較する能力である<sup>10)</sup>。ここで感覚像を複合分離しながら比較すると言われていることをもう少し具体的に言い換えればそれは、諸々の感覚像を複合分離しながらそこから或る意味内容 *intentio* を引き出してくる *elicio*, *elicere*<sup>11)</sup> ということである。ここで言われている意味内容というのは例を挙げれば真、偽や敵、味方などといったものである<sup>12)</sup>。そして狭義の表象力とは真偽に関わる意味内容を引き出して把捉する能力のことであり、その一方、ふさわしいもの、模倣すべきもの、欲すべきもの、避けるべきもの、嫌悪すべきもの、有害なものなど善悪に関わる意味内容を引き出して把捉する能力は表象力とは別に評定力と呼ばれる<sup>13)</sup>。

アルベルトゥスの『靈魂論』という著作<sup>14)</sup>によれば表象力とは感覚像と意味内容、意味内容と感覚像、感覚像と感覚像、意味内容と意味内容を複合分離する能力のことである。一方評定力とはたとえば「子供」などの抽象的な意味内容を引き出して把捉する能力であるとされる<sup>15)</sup>。なお『人間論』『靈魂論』両著作に何度も登場してくる「引き出す」という表現が持つ具体的な内容については本稿の3で明らかにするつもりである。

さて、アルベルトゥスはこのように抽象的な意味内容を扱う高度な判断能力をなぜ理性の能力とは考えず、あくまでも感覚能力の一種であると考えたのであろうか。それは、理性を持たないと考えられている諸々の動物においても上述のような判断に基

づく選択がなされているように思われるからである。たとえば棒を振り上げると犬が逃げるといような場合、犬は棒の形と悲しみという意味内容とを複合しているとアルベルトゥスは考える。あるいは羊が狼を見て逃げる、自分の子を見て慈しむといような場合、羊は狼の形と敵という意味内容を、自分の子の形と憐れみという意味内容とを複合しているように思われる<sup>16)</sup>。その他動物が家を作ったり食物を長期間保存したりする場合も同様である<sup>17)</sup>。

しかし、真偽善悪に係わる意味内容や子供などの抽象的な意味内容はそもそも普遍概念でなければならないのではなからうか。もしそうだとするとそれは理性でなければ理解することができず、したがって非理性的動物は受け取ることができないものではなからうか。そのような疑念が生じ得るように思われる。このような疑念に対してアルベルトゥスは恐らく次のように答えるであろう。表象力、評定力で考えられている意味内容 *intentio* は普遍概念のように普遍的共通的内容に即して受け取られ、考察され、推論に用いられるものではなく、今・ここという時間的空間的制限が常に加わっている個々の感覚像と分離されない仕方でのみ受け取られるものである<sup>18)</sup>。つまり、表象力、評定力が真である、偽である、善である、悪である、子供であるなどと判断を下す場合でも、表象力、評定力は真偽、善悪、子供ということの普遍的共通的内容を完全に把握しているわけではなく、ただ単に、今それについて判断を下しているところの判断対象に属しているかぎりでの当該意味内容だけを把握しているに過ぎないということである。実際我々人間も自然に関する真偽善悪の普遍的共通的内容を把握していないにもかかわらず、自然について真偽、善悪の判断を下す場合がある。

しかしもし真偽、善悪、子供などの意味内容をその普遍的共通的内容に即して把握していないのであれば、そもそも当該判断対象についてどんなに部分的な仕方であれ、真である、偽である、善である、悪であるなどと判断を下すことはそもそもできないのではなからうか。もしできるというのならば、そのような判断を普遍概念に基づいて下している他の何者かに従って判断を下す他なからう。この問題については次の2、3で詳しく論じることにする。

2に移る前に1の内容を簡単に整理しておきたい。アルベルトゥスによれば表象力とは、広義には諸々の感覚像を複合分離することによって意味内容を引き出し把握する能力であり、狭義には、真偽に関わる意味内容を引き出し把握するのが表象力であり、善悪に関わる意味内容を引き出し把握するのは評定力である。あるいは、意味内

容を引き出し把握するのは評定力であり、表象力は意味内容や諸々の感覚像を複合分離する能力である。いずれにしても表象力、評定力は様々な意味内容の把握と感覚像を伴う複合分離に係わる能力である。ただしここで意味内容とは普遍概念ではなく、あくまでも個別的特殊的内容のことである。

## 2 表象力、評定力と「自然」

1ではアルベルトゥスにおける表象力、評定力が真偽善悪に係わる感覚的判断能力であることが分かった。2ではこの表象力、評定力に判断を下させているとアルベルトゥスが主張する「自然」とは一体何であるのかについて検討する。アルベルトゥスによれば表象力、評定力は、人間が有する理性によって動かされているのでない場合は「自然 *natura*」の刺激 *instinctus* によって動かされる<sup>19)</sup>。そしてここで言われている自然とは、四元素の形相や四元素の複合物である鉱物の形相など自然物に固有な形相のことであるか、あるいは、諸物体に対する優位性のゆえにアルベルトゥスが非物的本質であるとまで言う魂のことであるかのどちらかである<sup>20)</sup>。しかしアルベルトゥスによれば魂は自然本性の秩序からして自然物に固有な形相よりも上に位置しているので、自然物に固有な形相に魂が動かされるということとはあり得ない<sup>21)</sup>。したがって、魂の能力の一部である表象力、評定力を自然物に固有な形相が動かすということもあり得ないように思われる。しかしだからといってそれでは何らかの魂が表象力、評定力を動かすのかと言えば、魂の能力の一部である表象力、評定力を動かすような魂の別の能力についてアルベルトゥスは魂に関する彼の説明のどこにおいても語っていない。しかも、表象力、評定力を動かすと言われる「自然」がもし万が一魂であるとしたら、固有な意味で自然であると言われるのは自然物に固有な形相であるとアルベルトゥスははっきり述べているので<sup>22)</sup>、魂のことをわざわざ「自然」と呼ぶ理由が理解できない。

表象力、評定力を動かすとアルベルトゥスが言う「自然」とはむしろ、天体の動者である純粹知性体が地上の物体形相や魂を生み出すために道具として用いる天体の光や運動と、それらによって動かされる地上の四元素の諸々の第一性質のことであると解釈した方が良いように思われる。

## 引用 1

まったく非物的な第一作用動者が存在する。しかしこの作用動者は質料に対して作用し、質料は対立するものから出来ていて諸元素と諸元素の諸性質から複合されている。そしてこのような作用動者は四通りに物的な道具を用いて作用する。そのうちの一つは力であり、これは天体のうちに在る。一方もう一つも力であるが、これは降りてくる天の光のうちに在る。三つ目は天の運動であり、四つ目は諸々の第一性質である。これは諸元素のうちに在る。それで、質料的に複合されているだけのものには上述のような動者は物的形相しか導入しない。たとえば石や金属がそのようなものである。このような形相は何であれ諸々の石や金属の相異によって物的に異なるものである。(中略) 一方栄養摂取的魂と感覺的魂は質料から産出され、質料の内に根を持っているが、しかしそれは非物的作用者の力によって、それが星々を動かす知性であろうと、生物の種子の内に在る形相付ける力であろうと、そのようなものの力によってのことなのである。ところで栄養摂取的魂と感覺的魂の根は元素的な形相や、元素の複合に伴う何かではない。そうではなくむしろ、種子を分配する魂から刻印された形相か、あるいは諸天球の動者から刻印された形相、ただしそれは物的道具、つまり諸天や星々の光、力、運動、自らのうちに天と魂の力を有している元素的諸性質によって引き出された形相なのであるが、そのような形相かのどちらかなのである。だから栄養摂取的魂と感覺的魂は物体の内に存在する力であり、物体なしには自らの働きをなさないものなのであるが、しかしこれらの魂の根、始まりは非物的な力から種子に刻印された形相であること、述べた通りである<sup>23)</sup>。

ここで言われている「まったく非物的な第一作用動者」とは、それが天体を道具として使いながら、四元素で出来ている地上の物体に作用するところからして、天体の動者である純粋知性体であると解釈してよからう。また「天体のうちに在る力」というのは分かりづらいが、恐らく天体の実体として不可滅性か、あるいは、純粋知性体のみ動かされ得るという受動的能力のことであろう。それから、栄養摂取的魂と感覺的魂の「根」あるいは「始まり」と呼ばれているものは、「星々を動かす知性」「諸天球の動者」によって刻印された形相か、あるいは「種子を分配する魂」「種子の内に在る形相付ける力」によって刻印された形相であるとされているが、最終的には

「非物体的な力から種子に刻印された形相」とされているので、究極的には天体の動者である純粹知性に由来するものと解釈してよからう。

表象力、評定力が天体の動者である純粹知性に、それが地上の物体形相や魂を生み出すために道具として用いる天体の光や運動と、それらによって動かされる四元素の諸々の第一性質を通して動かされるということを引用1の後半部分に従って言い換えるとすれば次のようになるであろう。すなわち、表象力、評定力は諸天球、星々を動かす知性が直接か、あるいは種子を分配する魂、種子内の形相付ける力を通して物体の内に刻印する感覺的魂の根、始まりに従って判断を下す。

現代科学において、引用1で言われている栄養摂取的、あるいは感覺的魂の根、始まりに相当するものは恐らく遺伝子であろう。そして、動物に備わっている判断能力については、学習の影響は排除されないにしても基本的には遺伝子によって規定されると説明されることであろう。ところで遺伝子の内容はDNAの突然変異にしろ遺伝的浮動にしろ何らかの偶発的要因によって決定されると一般的には理解されている。そしてさらに、たまたま遺伝子を取りまいていた自然環境に適応した遺伝子だけが生き残るとされる。確かにビッグバン以来宇宙には普遍的で不変的な物質法則が貫かれているという主張もあろうが、しかしそれが現存生物の姿を目ざしているというような目的論的な説明はなされない以上、現代科学においてはやはり現存生物の姿は偶発的要因によって規定されると考えられていると言ふべきであろう。

これに対してアルベルトゥスのような考えに従えば、天体の動者である純粹知性体は知性である以上、当然時間的空間的に制約されない存在である。しかもそれは宇宙全体の回りを規則的な移動運動で永遠に回り続ける天体を通して地上界に作用を及ぼすのであるから、その作用は神の奇跡などの偶発事によって一部妨げられる可能性は認められるものの、その大部分は実現するはずなので、それによって規定される表象力、評定力の判断にも一定の必然性があると言ふことができるのである。ただしこの必然性が具体的にはどのようなものかについては次の3で詳しく見てゆくことにする。

### 3 表象力、評定力と真理

2ではアルベルトゥスにおける表象力、評定力が、天体の動者である純粹知性体に動かされて判断を下すと考えられているということが分かった。3ではもっと具体的に表象力、評定力はどのように動かされて判断を下すのかについて検討する。アルベ

ルトゥスの理解するところによれば、ニュッサのグレゴリウスやダマスケヌスといったギリシア教父たちは表象力のことを虚構を作り出す能力と捉えている<sup>24)</sup>。アリストテレスも『靈魂論』第3巻ではこの箇所を字義的に読むかぎり表象力を虚構を作り出す能力と捉えている。それに対してアヴィセンナのようなイスラム思想家は表象力を、動物自身の側からではなくむしろ事物の側から判断の根拠を評定力とともに受容して真偽判断を下す能力であると考えている<sup>25)</sup>。本稿の1、2でも見た通りアルベルトゥスの表象力理解もこのアヴィセンナの立場を支持している。

では具体的に表象力、評定力は真偽判断の根拠をどのようにして事物から受容するとアルベルトゥスは考えているのであろうか。アルベルトゥスによれば表象力、評定力が「自然」、これはすなわち、天体の動者である純粹知性体が地上の物体形相や魂を生み出すために道具として用いる天体の光、運動と、それらによって動かされる地上の四元素の諸々の第一性質のことなのであるが、これらに動かされる時、この「自然」から評定力に対して諸々の物体の自然本性の意味内容が伝えられる<sup>26)</sup>。ここで言われている自然本性とは個々の物体に様々な在り方で普遍的に共通する自然本性なのであるが、しかしだからといってそれは普遍概念のようにただ知性の内にのみ在るようなものではなく、個々の物体に実際に実在的に受容されている自然本性なのである。そしてこの自然本性の意味内容も本稿の1で述べた通り普遍概念ではないので、他の個々の感覚像と結び付かなければそれだけではまったく不明で漠然としたものである。だから分析ではなく総合という仕方で諸物体の自然本性が最高類から順に、つまり実体、物体、生物、動物……というようにまずは単純で不明な漠然とした仕方で認識され、そしてその次にこのような各段階の実体・本質とその固有性、その他の付帯性が「自然」に従って複合分離されていき、そのようにして最終的には複雑で判明な個の認識へと到るのである。本稿の1で出てきた「意味内容を引き出す *elicio*, *elicere*」という表現も、表象力、評定力が「自然」から今述べたような普遍的共通的自然本性の意味内容を受容し、「自然」に従ってそれらを含む諸々の意味内容と諸々の感覚像とを複合分離していくことを意味しているように思われる。

## 引用2

理性が、あるいは評定力がいくらか混じっている感覚知覚は、感覚対象を付帯的に受容するものであり、感覚対象の偶然的発生は、個体に広がる共通的自然を超

えている。なぜならこの共通的自然とは事物において存在的に受容されている普遍だからである。(中略)以上のことから、非常に注目に値する或る事柄に気付くことができる。個についての判明な認識のなかで個に最も近いものは種であり、その後に類が来て、遂には最高類に到る。しかし、不分明で漠然としている感覚認識において第一のものは最高類の自然本性であり、その後そのもとにある類、その類の後に最下種の自然本性と来て、その自然本性のもとで個の認識も判明に受容されるのである。前者の認識は、分析するものである知性の役に立ち、このような認識においては感覚のうちにあるものは最初のものしかなく、何であれそこから分析によって受容されるものは何でも知性のうちにある。しかしこのように諸々の知的理解、知性認識対象のうちの或るものは他のものよりも感覚に最も近いものである。それは今述べた仕方である。一方後者の認識はその全体が感覚のうちであり、総合という方法によって認識がなされる。ここではより単純で不分明なものからより複合的で判明なものへと進んでいく。そしてこのようなプロセスは自然学に固有なものであり、他のどの学知にも固有ではない。なぜなら自然学でなければ、他のどの学知も普遍をこの仕方、つまり個物の内に存在的に混ぜられているものとして受容しはしないからである。だから自然学の普遍だけが感覚においてより知られるのである。一方他の学知は分析であり、ここにおいて普遍は純一な自然本性であって、感覚からは分離しているので、これらの学知の普遍は決して感覚のうちにはなく、知性のうちに在るのである<sup>27)</sup>。

引用 2 によれば「感覚認識において第一のものは最高類の自然本性であり、その後そのもとにある類、その類の後に最下種の自然本性と来て、その自然本性のもとで個の認識も判明に受容される」。この「プロセスは自然学に固有なもの」である。そしてその後は、感覚における個についての判明な認識を基に今度は知性が自らの内部において種、類、最高類といった普遍概念を分析という仕方、つまり受容するのである。このプロセスはどの学知においても行われるとされている。

ところで以上のように、天体の動者である純粹知性が表象力、評定力に対して虚構ではなく、自らが個々の物体に実際に実在的に与えている普遍的共通的自然本性を伝え、個の判明な認識へと到らせていると信用することがどうしてできたのであろうか。なぜデカルトが考えたような悪霊が我々を欺いている可能性を疑わなかったのであ



うか。それは恐らくグラントも言っている通り、自然は必要なものは必ず与え、不必要なものは何も与えないというアリストテレスの前提が中世においては広く受け入れられていたからであろう<sup>28)</sup>。表象力の目的は個のさらなる認識とそこから目指される必要な作業であり<sup>29)</sup>、このような必要な作業にとって虚構は不必要なものであるから、「自然」は表象力、評定力に虚構は与えないと考えられたのであろう。

## 結 語

アルベルトゥスによれば表象力、評定力とは真偽善悪に係わる感覚的判断能力である。この表象力、評定力は天体の動者である純粹知性によって動かされる。それも、天体の動者である純粹知性が地上の物体形相や魂を生み出すために道具として用いる天体の光、運動と、それらによって動かされる四元素の諸々の第一性質を通して動かされる。そしてこのことによって諸々の物体の自然本性の意味内容が最高類から順にまずは単純で不分明に漠然とした仕方と認識され、最終的には複雑で判明な個の認識へと到る。ここで認識される意味内容は普遍概念ではなく、したがってここではあくまでも個別的特殊的内容しか認識されないのであるが、しかしこの認識は同時に個々の物体に実際に実在的に受容されている普遍的共通的自然本性に基づくものである。このように、普遍概念には到らず個別的特殊的内容に留まらざるを得ない我々の感覚認識がアルベルトゥスにおいては、アリストテレスに由来しイスラム世界とキリスト教世界で発展していった古代中世独特の宇宙論、すなわち天体還元主義とも呼ぶべき思想と、そして、しばしば「自然は余計なものは作らない」というような言葉で表現されるいわゆる単純性の原理とによってその真理性が基礎付けられているように思われる。

またアルベルトゥスは個々の物体すべてが分有しつつ共有している自然本性の意味内容全体と、個々の物体を包み支配している諸天の運動どうしの力の相互関係を「端的に普遍的な自然」と呼び、その成り行き *cursus* について語っている<sup>30)</sup>。前者、すなわち、物体すべてが分有しつつ共有している自然本性の意味内容の全体とは、天体の動者である純粹知性体が天体の光、運動と地上の四元素の諸々の第一性質を道具として用いながら生み出す地上の物体形相、魂の意味内容全体と一致し、後者、すなわち、諸天の運動どうしの力の相互関係とは、天体の動者である純粹知性体が地上の物体形相、魂を生み出すために道具として用いる天体の光、運動の作用内容全体と一

致するように思われる。そして両者は、天体の動者たる純粹知性体が個々の物体に実在的に与えるとともに表象力、評定力に伝えると言われる普遍的共通的自然本性の意味内容全体と一致するように思われる。この意味での「自然」が常に単数で語られる理由もここにあると思われる。このような普遍的な自然、普遍的共通的自然本性が奇跡や偶発事なく保持されれば、つまり、表象力、評定力に伝えられた普遍的共通的自然本性が結果として部分的に虚構になってしまう限りは表象力、評定力の判断も真なるものとして保持されるということは本稿で述べられたことからして明らかであると思われる。

本稿ではアルベルトゥスにおける感覚的判断能力である表象力、評定力について論じたが、これらの能力と人間理性との関係については詳しく論じることができなかった。また、表象力、評定力理解に関してアルベルトゥスに絶大な影響を与えたと思われるアヴィセンナの思想とアルベルトゥスの思想の類似点、相違点について詳細に比較することもできなかった<sup>31)</sup>。さらにピュリダン初めアルベルトゥス以降の自然哲学者たちに対するアルベルトゥスの影響についても論じられなかった。これらはすべて今後の課題とせざるを得ない。

### 略号

- De homine*: Albertus Magnus, *Summa de creaturis*, secunda pars, *Opera Omnia*, ed. Borgnet, Paris: Vivès, 1896.
- De anima*: Albertus Magnus, *De anima*, *Opera Omnia*, Editio Coloniensis, Münster: Aschendorff, 1968.
- Phys.*: Albertus Magnus, *Physica*, *Opera Omnia*, Editio Coloniensis, Münster: Aschendorff, 1987.

### 註

- 1) Edward Grant, *The Foundations of Modern Science in the Middle Ages: Their Religious, Institutional, and Intellectual Contexts*, Cambridge: Cambridge University Press, 1996, p. 145; p. 195. 拙訳『中世における科学の基礎づけ』知泉書館, 2007年, p. 229; p. 306.
- 2) ここで「観察」observeと訳されているのは, Buridanの原文ではvidere(見る)とinvenire(発見する)である。Jean Buridan, *Quaestiones in Metaphysicam*, II, q. 2.
- 3) E. Grant 同箇所参照。

- 4) M.-D. Chenu, O. P., *Nature, Man, and Society in the Twelfth Century: Essays on New Theological Perspectives in the Latin West*, selected, edited, and translated by Jerome Taylor and Lester K. Little, Chicago: University of Chicago Press, 1968, p. 14, note 28.
- 5) Roger Bacon, *Opus tertium*, ed. J. S. Brewer, London: Longman, 1859, p. 30.
- 6) *Phys.*, lib. 2, tract. 1, c. 5, p. 83, ll. 4-32, 76-79.
- 7) 1245-46年頃アルベルトゥスがパリ大学の神学修士として著したとされる『被造物大全』*Summa de Creaturis*の第5巻『人間論』*De homine*は第4巻とともに単独で広く流布した。内容は明らかにアリストテレスの『靈魂論』に即したものである。Cf. J. A. Weisheipl, "The Life and Works of St. Albert the Great", *Albertus Magnus Commemorative Essays 1980*, ed. J. A. Weisheipl, Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies, 1980, p. 22.
- 8) Aristoteles, *De anima*, lib. 3, c. 3, 429a1-2.
- 9) 想像力とは事物が現存しない状態で感覚対象を保持する能力のことである。*De homine*, q. 37, a. 1, solutio; *De anima*, lib. 3, tract. 1, c. 1, p. 166, ll. 48-50.
- 10) *De homine*, q. 38, a. 1, solutio.
- 11) Impero, imperare (命令する, 支配する)の対義語。
- 12) *De homine*, q. 38, a. 1, ad def. 2, ad 1; *De homine*, q. 38, a. 2, solutio. ここで intentio を「意味内容」というように「意味」という言葉を使って訳した理由の一つは、アルベルトゥスによれば intentio を伴っているということが動物の発する音を単なる音ではなく音声、つまり或る意味で意味表示するものにする必須条件でもあるからである。Cf. Irven Resnick and Kenneth Kitchell, "Albert the Great on the 'Language' of Animals", *American Catholic Philosophical Quarterly*, vol. 70, no. 1, 1996, pp. 47-48.
- 13) *De homine*, q. 39, a. 1, solutio et ad 1; a. 2, solutio.
- 14) 1254-57年アルベルトゥスがドミニコ会ドイツ管区長だった時代に執筆されたと推測される。Cf. J. A. Weisheipl, *op. cit.*, p. 35.
- 15) *De anima*, lib. 3, tract. 1, c. 3, p. 168, ll. 27-31; c. 2, p. 167, ll. 36-48.
- 16) *De homine*, q. 37, a. 1, ad 1.
- 17) *De anima*, lib. 3, tract. 1, c. 3, p. 168, ll. 38-55.
- 18) *De homine*, q. 39, c. 2, solutio; *De homine*, q. 39, a. 2, ad 2; *De anima*, lib. 3, tract. 1, c. 2, p. 167, ll. 54-58.
- 19) *De homine*, q. 39, a. 2, ad 3; *De anima*, lib. 3, tract. 1, c. 3, p. 168, l. 77-p. 169, l. 3. 非理性的な動物は自然だけに動かされるという表現はすでに4-5世紀のネメシウスに見られる。Cf. Nemesius, *De natura hominis*, ed. Moreno Morani, Leipzig: BSB B. G. Teubner Verlagsgesellschaft, 1987, p. 37, ll. 2-3; ed. G. Verbeke et J. R. Moncho, Leiden: E. J. Brill, 1975, p. 48, l. 59. ただしアルベルトゥスは当時の他の西欧

- 人と同様、ネメシウスのことをニュッサのグレゴリウスだと思っていたであろう。Cf. Peter Theiss, *Die Wahrnehmungspsychologie und Sinnesphysiologie des Albertus Magnus*, Frankfurt am Main: Peter Lang, 1997, p. 20; Nemesius, *De natura hominis*, ed. G. Verbeke et J. R. Moncho, 序文。一方トマス・アクィナスにおいてはこの議論はこれ以上進展していかないようである。Cf. 周藤多紀「トマス・アクィナスにおける思考力 (vis cogitativa) - 表象像の準備におけるその役割 -」『中世思想研究』(中世哲学会) 第 41 号, 1999 年, pp.76-87.
- 20) *De anima*, lib. 2, tract. 1, c. 3, p. 67, l. 46-p. 68, l. 4.
- 21) *De anima*, lib. 2, tract. 4, c. 12, p. 165, ll. 1-13.
- 22) 註 20 参照。
- 23) *De anima*, lib. 1, tract. 2, c. 13, p. 54, ll. 28-40, 84-p. 55, l. 8.
- 24) *De homine*, q. 38, a. 1, ad dif. 2, ad 2.
- 25) *De anima*, lib. 3, tract. 1, c. 6, p. 172, ll. 4-10, 29-35.
- 26) 以下に出てくる引用 2 などこの内容に関係する箇所では意味内容 *intentio* という用語は一度も出てこない。しかしその内容や、そこで用いられている例からして、ここで自然本性 *natura*, 普遍 *universale*, 不定の個 *individuum vagum*, 像 *imaginatio* などと呼ばれているものはすべて本稿の 1 で論じられた意味内容 *intentio* と同じであると解釈して良いと思われる。
- 27) *Phys.*, lib. 1, tract. 1, c. 6, p. 11, l. 94-p. 12, l. 4; *ibid.* ll. 44-63. Cf. *Phys.*, lib. 2, tract. 1, c. 2, p. 79, ll. 5-10.
- 28) E. Grant, *op. cit.*, pp. 145-147. 上掲訳書 pp.229-231 参照。Cf. *De anima*, lib. 3, tract. 4, c. 2, p. 230, ll. 68-69; tract. 5, c. 1, p. 244, l. 1.
- 29) *De anima*, lib. 3, tract. 1, c. 3, p. 168, ll. 7-38.
- 30) 註 6 参照。
- 31) アヴィセンナは『治癒の書』第 2 部「自然学」(西欧では通称 *Sufficientia*) 第 1 巻で、本稿の引用 2 と類似した内容を語っているが、評定力には直接言及していない。また、評定力について語っている第 6 巻でも、本稿の引用 1 で語られているような「自然」と評定力は結び付けられていない。Cf. *Avicenna latinus*, ed. S. Van Riet, Louvain-la-neuve: E. Peeters/Leiden: E. J. Brill, 1992, *Liber primus naturalium*, tract. 1, c. 1, p. 16, ll. 96-100; *Liber de anima seu Sextus naturalium*, 4 pars, c. 1, p. 6, l. 79-p. 8, l. 101.